

# 居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと

小沢 一仁\*

Possibility that having own identity finding 'Place' in society  
Without religion and exclusion

Kazuhito OZAWA\*

Ethnic, inter-cultural, ideological and religious conflicts cause identity crises. On identity crises, those who have deep conflicts can not choose own "social prototype(Erikson,1959)". Erikson pointed that social prototype tells people what they are, who they are, how they live and their identity. Social prototype as to race, culture, ideology, and religion affects them to achieve their prominent identity. However, these social prototypes bring them to discrimination, war and so on. This study discusses that possibility that they achieve their own identity, not by using that social prototype, but by finding their own 'Place' in society.

## 1. アイデンティティが問題となる、アイデンティティ危機とは何が問題となっているのか

(1) 日常生活の中に、そこでの悩みや葛藤にはアイデンティティの問題は現れるか？

アイデンティティとは、どのような状況で、どのように、意識の中で問題になるのか。

アイデンティティという概念は、エリクソンが提出して以来(Erikson,1959)、様々な領域に広まっていた。しかし、あらゆる場面や状況においても、アイデンティティという言葉を用いることができるものではない。まず、アイデンティティが、いかなる状況や場面で問題になるかを検討していく。

そこで、日常生活において、アイデンティティが問題となるかをみていくために、日常生活における悩みや葛藤の生じる状況を考えてみよう。

例えば、学校に在学している間は勉強、社会の中で働いていれば仕事、家庭においては家事や育児等、主たる活動の対象がある。そして、このような主たる活動の対象が、学校の勉強から社会に出てからの仕事及び家事等と移り変わっていく中で、その選択に悩んだり葛藤することがある。

一般的な、学校の進学そして社会への就職という

中での悩みの様子を推測して記述してみると

みんなが行くから、とりあえず、高校へ行った。高校では、勉強がいやで成績では苦労したが、それなりに楽しかった。それなりに、勉強して、自分の成績で行ける大学へ合格した。大学では、そこそこ勉強して単位を取って、遊んだ。3, 4年になって、就職活動が始まると、大変だった。何社か苦労して受け、内定をもらったときはうれしかった。会社に入ってみると、給料をもらう大変さに驚いた。今も、上司や同僚の中でなんとか仕事をしている。

と、このような、高校から大学そして就職へと、移り変わる状況の変化における悩み、葛藤において、ここに、アイデンティティの問題は、あるだろうか。ここだけにはないと言える。正確に言うと、ここだけでは、アイデンティティの問題は、表面には現れていない。つまり、日常生活の中で、高校から、大学へ、そして社会へと、生きていく主たる状況が変化することを示すだけでは、そこには、アイデンティティの問題は生じてこず、表面化していない。

だからといって、日常生活が、陳腐で無意味なもの、味気ないもの、価値のないもの、拒絶すべきものと指摘しようとしているのではない。ここで示したいことは、日常生活においては、アイデンティティ

\* 東京工芸大学工学部基礎教養研究センター助教授  
2003年9月17日 受理

イが問題になることはない、ということである。

次に、日常生活においては、人間関係の問題において、悩みや葛藤が生じることがある。例えば、

友人関係の中で、いざこざがあり、自分の言っていることが誤解されたり、理解されずに、仲のいい親友に相談したりして、話し合ったりして何とかして解決できた。と、このような中に、アイデンティティの問題が現れているだろうか。

家庭において、大学において、職場において、人は、対人関係のいざこざに悩まされるものである。そこでは、対立があり、和解があり、不和があり、喧嘩があり、融和があり、妥協があり、様々な問題がある。この対人関係の問題は、親子、友人、異性、夫婦、など様々な、対があり、どれも、解決に難しい問題である。しかし、対人関係の問題においても、それだけでは、アイデンティティの問題は、生じてこない。

日常生活の中で、平凡さの中に埋没することもあれば、悩む、葛藤することもある。そうして、日々生きているのであるが、その状態だけでは、アイデンティティの問題は、あからさまに、表に現れ、問題とされるものではない。これは、日常生活、そして、そこに生じる悩みや葛藤を、先に示したように軽んじるものではない。しかし、そこには、アイデンティティの問題は、現れていないということ指摘しているのである。

(2) アイデンティティの問題が現れた、アイデンティティ危機の例をみていくと  
エリクソンは、次のように述べている。

私にとって、アイデンティティというのは、激しい混迷とともに権力闘争にも関係をもつものだ。それは生死にかかわることがらであって、どんな種類の素敵なアイデンティティをもちたいかなどという意識的選択の問題では絶対でない。私にとって、アイデンティティとはその人の中の最善のものがそれによって生きるものの謂であり、その喪失はその人々の人間性を減ずるものでさえある。(Erikson, 1973 近藤邦夫 訳 p165)

では、アイデンティティの問題が現れている具体例を、小説「フランケンシュタイン」から見ていこ

う。フランケンシュタイン博士によって、造られたモンスターは、次のように、叫ぶ。

"...I was unformed in mind; I was dependent on none, and related to none. ...there was none to lament my annihilation. My person was hideous and my stature gigantic; What did this mean? Who was I? What was I? Whence did I come? What was my destination? These questions continually recurred, but I was unable to solve them."

「私の気持ちは戸惑い、つかみきれない。というのも、私は何にも頼るものがない、何にもつながっているものがない。この悲しみは消えることがない。俺という人間は隠すべきものであり、俺の身体は巨大だ。これはいったいどういうことなんだ？俺は誰だ？俺は何者だ？俺はどこから来たのか？俺の行き着く先は何だ？このような問いが繰り返し私の心にわいてきた。だが、私にはそれに答えることはできなかった。」

Mary Shelly "Frankenstein" 1831 Reprinted 1996 W.W.NORTON & COMPANY P86.

これは、まさに、アイデンティティの問題が浮き彫りとなっており、アイデンティティ危機の叫びであるといえる(小沢,2000)。フランケンシュタイン博士に造られた人造人間であるモンスターは、その身体に故に他者から受け入れられることがない。俺は誰だ？俺は何だ？という問いは、まさにアイデンティティ危機を示すものである。ここでは、自分が他者から受け入れられないという葛藤を通して、自分自身が問題となっている。このような、自分は何かという問いかけは、自分が自分であることが問題となっており、つまり、主観である意識している自分が、こうして生きている自分のことを納得して受け入れることができないことが問題となっているのである。

さらに、次のような、アイデンティティの問題も見ていこう。

「俺は何者だ？」

「えっ？」

「俺は何者だ？」

桜井は少し迷った末に、答えた。

「……………在日韓国人」

僕は立ち上がり、胸像の台座の部分思い切り三回蹴ったあと、桜井に向かって言った。

「……………」

言っとくけどな、俺は<在日>でも、韓国人でも、朝鮮人でも、モンゴロイドでもねえんだ。俺を狭いところに押し込めるのはやめてくれ。俺は俺なんだ。いや、俺は俺であることも嫌なんだよ。俺は俺であることから解放されたいんだ。俺は俺であることを忘れさせてくれるものを探して、どこでも行ってやるぞ。……………」

金城一紀「GO!」2000 講談社文庫 P245-246.

民族、人種などによる差別と偏見は、それを受ける側において、アイデンティティの問題を引き起こす。この主人公は、こうして生きている自分を、差別と偏見によって、否定されるという体験を通して、その否定される自分を、受け入れることができないという葛藤を叫んでいる。

さらに、次の例は、やや表現形態としての切実さは低いが、他者への承認を求めるという意味で、見てみよう。

「- おふくろさんはおれの顔なんか、見たくないっていうかもしれない……………でも、おれはこの顔を見てもらおう。おふくろさんはおれをなくるかもしれない。……………でも、おれはよけないでおこう。おれは、やっぱりおふくろさんの子だということを、わかってもらおう。そして、やっぱり、おれがおれであることも、わかってもらおう! -」

山中恒 「ぼくがぼくであること」1973 角川文庫版 1975 P312.

この児童小説の主人公の秀一は、母親から認められないことをきっかけに、ひょんなことから家出してしまう。そして、一夏、夏美ちゃんとおじいさんの家で働くことを通して、自分に対する根源的な自信を得ていく。その「ぼくがぼくであること」という思いを、自分を拒否した母親にも、わかってもら

おうと試みる。つまり、他者とは、自分を拒否する存在でもあるが、自分の承認を求める存在でもあるということである。

### (3) アイデンティティ危機において、心の中に何が起きているのか

このような例から見えていくと、アイデンティティ危機においては、いかなることが問題となり、いかなる葛藤が生じているのか。アイデンティティが問題となり、アイデンティティ危機が生じるとき、そこでは何が起これ、どんな葛藤が生じているのかを見ていこう。

アイデンティティの問題とは、まず、自分が自分を対象として見つめることが、前提としてある。つまり、日常生活を送る上では、問題とする必要のない、こうして生きている自分のことを問題とし、逃れようのない、このこうして生きている自分を、いかにして納得して受け入れるかが、問題となっているのである。

そこで、第一に、ある状況において他者から自分が否定されることが生じている。それは、差別であったり、偏見であったり、期待にそわなかったりというものがある。人種、民族等の、差別や偏見は他者への否定を引き起こす。

第二に、その否定された自分に対して、「いや自分は、そんな自分ではない。」と、否定された自分を、自分が否定することが生じる。そうしてこそ、アイデンティティ危機となる。つまり、ある状況における、否定された自分を、自分が否定し、納得して受け入れない。つまり、「自分は、そんな自分ではない。」「私は～ではない。」という思いをもつことである。

第三に、では、自分はどんな自分なのか、人間なのかと答えることはできない。つまり、否定された自分を納得して受け入れられないのであるが、では、どんな自分を納得できるのかということとそれができないのである。そこで、「私は、どんな自分なのか?」「私は誰だ?」「自分はいったいどんな人間なのか?」という問いが、そこで、発せられるのである。

第四に、エリクソンが W.ジェイムスの手紙の引用でアイデンティティ(の感覚)を得た例として、挙げていた、「これが本当の自分だ。(This is the real

me.)」というように(Erikson,1959)、自分が自分であると納得して思えることを目指しているのである。

第五に、他者からの承認への渴望である。あたらなる自分を自分自身でも納得したいという渴望とともに、その自分を他者からも承認してもらいたいという思いがある。

つまり、アイデンティティの問題が生じること、言い換えるとアイデンティティ危機に陥ることとは、他者による自己否定、そして、自分による自己否定、さらに、新たなる自己の渴望、しかし、見えだし得ない葛藤、さらに、自分を納得して受け入れるという自己肯定、続いて、他者による承認への渴望という一連の葛藤のプロセスがあることが考えられる。

筆者が以前示した模式(小沢,2000)をもとにして示せば、以下ようになる。

<他者からの拒否>

<自己否定>

自分 自分・・・「こんな自分は嫌だ。」

<自己探求>

自分 = ? ……「自分は一体誰か？」

<自己肯定>

自分 = 自分・・・「これが本当の自分だ。」

<他者からの承認>

図1 . アイデンティティ危機のプロセス

## 2 . アイデンティティ危機のプロセスに関わるダイナミズムについての解明

### (1) この問題への現象学的アプローチ

このような、アイデンティティ危機から達成へのプロセスに対して、現象学的アプローチを、行ってみるとどうなるか。竹田(1989)による現象学とは、「確信成立の条件」を明らかにすることであるとされる。この見方を適用すると、自分が自分でないという実感、言い換えると確信は、いかにして生じて

いるのかを明らかにすることが、現象学による適用である。

アイデンティティ危機から達成へのプロセスを、他者からの拒否をきっかけにした、自己否定 自己探求 自己肯定、そして他者からの承認を求めるといふ流れとして捉えると、このような自己否定、自己探求、自己肯定というそれぞれ明確に感じられる実感、言い換えれば、確信が生じる条件は何かを明らかにすることが、竹田による現象学的方法の適用といふことができる。つまり、対象を突き詰めてその根底にあるものを明らかにすることと理解される。

(2) 自分が自分であることの底にあるものとは筆者は、アイデンティティを、「自分が自分であること」、「私が私であること」と捉えているのであるが、このことをひとつひとつ解きほぐしていってみる。

そこで、まず「自分が自分であること」において、前者の自分を考える。さらに、後者の自分を考える。そして、前者と後者の自分をイコールで結ぶとは、いかなることかを考える。

見つめる自分の背景にある、自分を納得して受け入れたいという思い

まず、前者の自分とは、主観において意識として自分を見つめる自分である。見つめる自分とは、対象化していかなるものかとは言いにくいものがあるが、自分において、見つめる自分と見つめられる自分が分割されることから、アイデンティティの問題は生じるのである。

その中で、見つめる自分とは、主観とか、意識としか言い様のないものである。しかし、この主観としての自分は、いかなる根底を持っているかという、自分への愛情、自分自身への肯定への思い、こうして生きている人間である自分を納得して受け入れたいという思い、渴望ではないか。つまり、こうして生きている自分に対する、愛しさであり、慈しみであり、大切なものであり、何ものにも代え難いものであるという思いがあるといえる。

自分が自分であることを、納得したい、納得して受け入れていきたい、という思いこそ、見つめる自分の根底にあるといえる。

他者から否定されて、その通りであると思えない、

自分自身を肯定したいという渴望がある。他者からの差別や偏見を受け、他者から自己否定されても、この受けた否定に対し、自分では納得いかない。他者から否定を受けた自分自身を肯定するわけにはいかない、納得するわけにはいかない。他者からおまへはダメだと否定された。それで、そうだ、おれはダメだと肯定はしない。そこには、自分を大切に、自分を納得して受け入れたいという思いがあるからこそ、他者からの否定に、うなずけないのである。

#### 後者の自分における、宿命、縁、実存

では、後者の自分とはいかなるものか。自分がどうしてこのような人間として生まれ生きているか。後者の自分、つまり、こうして生きている自分という人間であること、これは、宿命としか言いようがなく、日本語で言う縁としか言いようがないことである。後から述べるが、向こうの世界、この世以外の世界を想定すれば、なぜ自分はこういう人間としての自分として生まれ生きているのかという問いに答えることができる。しかし、この世に限定して考えれば、なぜ自分は自分なのかという問いに答えることはできない。つまり、宿命、縁、実存としか言いようのない。

このように、筆者は、こうして生きている自分、言い換えると、こうして生きている人間としての自分が生きていることを、宿命であり、縁である、実存と呼んだ(小沢,2002b)。つまり、この時代に、この社会に、この国に、この地域に、この親のもと、この家族とともに、この身体を持って、男/女として、様々な特徴を持って、生まれ、今の年齢にまで生きている人間。このこうして生きている自分とは、この世の世界で限定して語れば、選択したものではない。宿命ともいふべき、縁ともいふべきものである。そして、誕生し限りある人生を生きていること、つまり、誕生から死へのみちのりを歩んでいることもまた、宿命ともいふべきものである。

アイデンティティとは、個の独立、主体性の確立、個人が他者との違いの主張など、西欧的な個人観を背景に、エリクソンが提示したものと考えられるし、そのように受け取られるものである。そこで、日本においても、アイデンティティが問題になるのか、という疑問が寄せられる。日本においても、差別や偏見等様々な他者からの拒絶が生じることがある。

さらに、後者のこうして生きている自分を宿命、縁、実存として捉えた場合、アイデンティティとはいかなる人間においても問題になりえるといえる。

例えば、アイデンティティ、つまり、自分が自分であること、自分がこうして生きている人間であること、自分がこうして生きている人間の、宿命、縁、さらには、これらに関わる、生死の悲哀を、示したものに、一遍による以下の言葉がある。

「六道輪廻の間には、ともなう人もなかりけり  
独りむまれて独り死す  
生死の道こそかなしけれ」和讃 百利口語

一遍上人全集 橋俊道・梅谷繁樹編 1989 春秋社 p206.

ここで示されていることは、誕生と死という間、生きること自体にまつわる、孤独というもの、六道輪廻という、向こうの世界まで想定したものであるが、どこまで行っても、自分がこうして生きている自分であるということから、逃れ得ないということである。筆者は後に見るように、向こうの世界を想定することなしにアイデンティティをこの世の世界において限定的に語っていこうとするものであるが、この世に限定してもなお、自分がこうして生きている自分であることは、宿命、縁、実存と呼ぶべきことである。

#### 自分が自分であることを納得して受け入れるための基準

溝上(2002a)は、エリクソン以前における哲学の歴史の中で、アイデンティティの問題がいかに議論されてきているかを振り返っている。このようなアイデンティティを哲学的領域にまで広げて根本的に問い直していこうとする姿勢はエリクソンの流れを受けてアイデンティティ研究では行われてこなかったことであり、アイデンティティとは何かを問い直す意義がある。この議論を通して、溝上はアイデンティティの問題とは、「同定確認(identify)の揺らぎによって、同一と差異の『あいだ』を行ったり来たり」する「主体的な同定確認(identify)の行為」であるとしている(P22.)。

アイデンティティにおいて、問題なのは、これと

あれが、別々のものか、同じものか、例えば、これとあれは、同じ椅子であるかどうか、同じ机であるかである。しかし、ひとりの人間において、アイデンティティが問題になり、エリクソンの提示したアイデンティティで問題となっているのは、本来問うべきもない、自分が自分であることを問題としている。つまり、あそこにあるものと同じにあるものが、同じコップであるか、問題となっているのではなく、ここにあるコップ(ここにいる自分)が、ここにあるコップである(ここにいる自分)かどうかを問題にしているのである。コップが自ら自分を問うことはないが、人間においては、自分が自分を問うことはあり得る。そこでは、問うものと問われるものを、区別されなければならない。この点から、筆者は、前者の自分を、主観としての意識としての自分とし、後者の自分をこうして生きている人間としての自分としたのである。

この点で、本来ひとつのものである、自分という人間において、自分が自分であることが問題になるということは、自分=自分、のように、「である」そして、「=イコール」で示したものは、「同じこと」を意味しているのではないといえる。では、何を示しているかということ、自分が自分を納得して受け入れることができるかと考えることができる。

そして、そこで、いかなる基準によって、自分がこうして生きている自分であることを納得して受け入れるかということが問題となる。

自分が自分であることは、当たり前のことであり、疑うまでもないことである。しかし、時に、こうして生きている自分のことに対して、違和感が生じることがある。こんな自分は自分ではない、では、いったいどんな自分なら自分は自分のことを受け入れられるのか。

自分が自分であることに違和感を感じる、ということは、自分が自分であるという当たり前のことを、納得して受け入れるには、基準があるということが浮かび上がってくるのである。

他者が自分を否定する、差別や偏見というものは、他者から押し付けられた、自分が自分であることの基準である。誰かがその人であることを、規定する、基準として、様々なものがある。自分がその他者からの否定を納得できないのは、自己否定されたからではあるが、さらに、その根底に、他者が自分に押し

し付ける、基準自体を受け入れられないからである。他者の押し付ける基準を、自分がこうして生きている自分であることの基準として、受け入れられないからである。そこで、自分はどのように他者から否定された自分ではない(自分 自分)と思う。さらに、では、いったい自分はいかなる基準において自分を肯定し、納得して受け入れるのか。それがわからないので、自分が自分であることがわからない(自分=?)という問いが発せられるのである。

つまり、アイデンティティ危機とは、自分が自分であることの基準を、疑い、問い直すことによって、自分が自分であることの基準を見失うことである。このように、アイデンティティ危機とは、いわゆる底が抜けた状態であるといえる。自分を捉える基準、受け入れる基準がわからなくなってしまった状態である。

このように、自分がこうして生きている自分であることの根底にあるものを図式化すると以下のようになる。

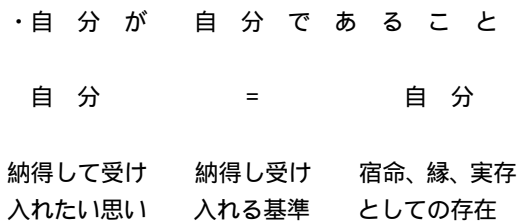


図2 .自分が自分であることの根底にあるもの

### 3 . 自分が自分であることを納得して受け入れる基準を考える

#### (1) エリクソンの社会的プロトタイプと心理社会的価値観という基準

Erikson(1959)は、民族的地域、歴史的時期、経済的追求を共有する人間は、善悪の共有するイメージによって、生きる方向性を示されている、導かれていると指摘し、この善悪についての共有するイメージを、社会的プロトタイプ(social prototype)と言いつづけている。

そして、エリクソンは、アイデンティティ危機に

陥った事例を分析する中で、そこには、社会的プロトタイプについての葛藤があることを示している(Erikson,1959)。例えば、アメリカにおけるユダヤ系移民の青年における、善を示すドイツ人・対・悪を示すユダヤ人という社会的プロトタイプに対して、自分をどう位置づけたいか、わからず、アイデンティティ危機に陥った事例を挙げている。つまり、社会的プロトタイプにおいて悪とされた側にとっては、他者からの自己否定となり、アイデンティティ危機のきっかけとなる。

この社会的プロトタイプは、善とされる側にとっては、自分が自分であることの基準となっており、自己を肯定する基準となっているが、悪とされた側においては、自己を否定される基準、見方、枠組みの押し付けとなっているのである。

筆者は、この社会的プロトタイプという概念を、さらに、エリクソンの心理社会的という用語を用いて、個人が生きる上での大切なことを示しているという意味から、無藤(1979)による価値観の提示にヒントを得て、心理社会的価値観と言い換えた(小沢,2002 a)。この社会的プロトタイプも、個人の主観的視点で捉えた心理社会的価値観も、自分が自分であることを納得して受け入れる基準を示すものと考えられる。

差別、偏見に見られるように、宗教、人種などについての社会的プロトタイプを背景にして、他者から否定されることは、アイデンティティ危機を引き起こすのは、自分が自分であることの基準に関わる問題であるからである。この問題については後述する。

## (2)人生のスタートしての誕生から迎ると

では、発達上の問題について、アイデンティティ危機がいかに生じるかを、見ていこう。エリクソンは、アイデンティティ概念を臨床概念から、発達概念へと転用したことを述べている(Erikson,1959)。そこで、エリクソンの示す人生のスタート、ライフサイクルの始めの心理社会的危機からさかのぼって、青年期のアイデンティティ危機に至るまでを考えていく。

エリクソンは人生はじめの心理社会的危機を、基本的信頼対基本的不信の葛藤と呼んでいる(Erikson,1959)。ここから、青年期のアイデンティテ

ィ危機つまり、自分が自分であることの基準への問い直しに至るみちすじをたどって試してみる。ここでは、やや大まかなアウトラインをたどるといってもやや乱暴な論の進め方をしていくことを了承いただきたい。

人生のスタートしての誕生時は、100%養育者(親)に生存を依存している状態である。養育者の世話なしに、乳児は生きていくことができない。つまり、養育者の世話こそが、自分が生きていくことを握っている。ボールビーのいうアタッチメントとは、養育者という自分の命を握る他者との間の命綱のことであるといえる。

つまり、この人生の始まりにおいては、養育者にいかに世話をされ、いかに愛されるかに、自分の生存がかかっているといえる。やや強引に、この状態において、自分が自分であることを納得して受け入れる基準は何かと取って言えば、養育者の愛情を自分が得ることである。つまり、養育者からの愛情を得ることができなければ、自分が自分であることを納得して受け入れることはできないだろう。

このように、養育者からいかに愛されるかは、誕生においても、乳児から幼児にとっても生存に関わる問題であり、例えば、フロイトのエディプス・コンプレックスは、母親、父親の双方からいかに愛されるかが問題となっているといえる。さらに、アドラーによる、出席順位ごとの性格特徴の提言においても、きょうだいをライバルとしながら、いかに親からの愛情を自分の方へ引き寄せるかが、問題になっているといえる。

逆に言えば、成長していく過程で、親からの愛情を得ることが生きていく上で必要ではなくなると、フロイトのエディプス・コンプレックスで言えば、異性の親に愛情を感じ同姓の親に嫉妬することもなくなり、アドラーのきょうだい関係で言えば、きょうだいゲンカをすることもなくなるといえる。

サリバン、プロスが主張するように、成長していく過程で、親子関係の次に、友人関係が重要となっていく、徐々に、親からの自立が進んでいく。

親からの依存の割合が減少していくとは、いかなることか。誕生時においては、生存することは養育者である親の愛情をいかに得るかということにかかっている状態であった。つまり、「親の愛情を得ることによって、生存することができる。」「親の愛

情を得るために生きる。」という状態である。そこから、自分でできることが増えていくことから、親に依存する割合が減少していき、自分の生存を自分の力で得ていくことができるようになっていく。つまり、親の愛情を得ることによって生きていたが、自分の力で自分の生存を獲得することができるようになる。

子ども時代の自分から、大人として成長していく過程の中で、親の愛情を得るために親の期待を引き受けることは、生存のために必要なことであった。溝上(2002b)が、マーシャの提示したアイデンティティ・ステータスの親の期待に疑いを持たずに自分の希望としているF地位について議論していたように、F地位であることは、本人にとって問題が生じなければ、端からよくないとか、悪いとか言う筋合いはない。つまり、親の期待を引き受けてそれを自分の希望にするということがスムーズに個人において行われていけば何も問題はない。

中には、大人として社会の中で生きていこうとする過程の中で、親とは別の他者から自分が拒否されたり、親の期待とは異なった価値観に接したり、これまでの自分では通用せず他者からの承認が受け入れられなかったりしたときに、親の期待を引き受けてもった基準を、根本的に疑い、問い直すことが生じる。

自分は、これまでのように親の愛情を受けることが第一の目的として生きてきた、自分ではない。親の愛情を受けることは私の生存にとってもはや必要なことではない。よって、親の期待を受け入れることは、その基準を、自分が自分であることを納得して受け入れるための基準としていいかどうかは、問い直し確認する必要が出てくる。では、何のために生きていくのか、何を目指して生きていくのか、指針としての親の愛情はもう必要のないものとなってしまった。では、それに変わるものは何なのか。または、親の愛情は必要のないものとなってしまったが、親の期待とは果たしていかにして自分にとって意味のあるものなのかを、これまでは無自覚に受け入れてきたが、ここでいかなる意味があるのかを自分自身で問い直すのである。

成長する中で、自分の生存に関わるものが、親の愛情を得ていくことから、いかに転換していくか。この転換の中で、自分よっての疑いや問い直しが

生じることによって、アイデンティティ危機が生じることがある。それは、自分が何をして生きていくかということ、自分自身で問い直すことによって、自分が生きていくことを支えてきた基準を、もう一度、確かめ直し、問い直すことである。これが、発達上で、青年期において、アイデンティティ危機が生じる場合である。

子どもから大人になっていく過程の中での、自分が自分であることを納得して受け入れることができる基準を模索することは、例えば、自分がどんな大人になっていくのか、どんな男であり女になっていくのか、社会の中で何をして生きていくのか、という葛藤にみるることができる。つまり、自分が、こうして社会の中で大人として生きている自分であることを納得して受け入れることができる基準は、何かという問題である。

例えば、職業選択において、自分が大人として生きていく上で何をしたいらいいのかを迷うのは、自分が自分であること、自分がこの人生を歩んでいる自分のことを、いかなる職業につくことが納得して受け入れられるものなのかという葛藤があると考えられる。

さらに、このような職業選択や、大人としての男性として/女性としての自分を納得して受け入れる基準を探すことは、簡単ではない。よって、自分が自分であることの基準が見つからないまま、探したまま生きるしかない場合もある。この際に、エリクソンのいう役割実験(Erikson,1959)が必要となる。つまり、役割実験の意味とは、新たな基準を探すことでもあり、さらに、新たな基準を探す自分について、より根底的な自分についての自信を得るための活動であると考えられる。つまり、より根底的な自分が自分であることの基準を、獲得していくのであるといえる。

#### 4. 宗教の問題とこの世界に限定するという意味での居場所の問題

(1) 向こうの世界を想定しての答え方 - 宗教 -  
西平直(1993)は、「シュタイナーから見れば、エリクソンはずいぶん無理をしたものである。アイデンティティの根拠を切り捨ててしまった地平にアイ



デンティティを求め、サイクルの持つ時間的な広がり拒否した地平にライフサイクルを求めている。」と述べており、アイデンティティとはこのように、向こうの世界、あの世までを含めてしまう可能性、危険性をもつ概念である(小沢,2002b)。なぜなら、向こうの世界を設定し、向こうの世界から語る事ができれば、自分がこうして生きている自分であるのはなぜか?という問いの答えを、出すことができるからである。

自分がこうして生きている自分であることは、宿命や縁という問題であり、この時代に、この世界に、この社会に、この地域に、この家系の中で、この親のもと、この家族の中で、男として女として、この身体をもって、様々な性格の特徴を持って、産まれ生きている人間であることは、なぜか?と問うても、簡単には、答えられない問題である。アイデンティティを、このような実存的視点で捉えたと、自分がこうして生きている自分であることを、いかにして納得して受け入れることができるだろうか、が問題となる。

この答えを提示するものとしては、「宗教」がその役割を果たしてきたといえる。宗教は、向こうの世界、この世ではない世界から、説き起こし、個人が生きる意味を提示するものである。実存的視点で捉えた、自分がこうして生きている自分であることの宿命、縁を問いかけることは、宗教の領域、向こうの世界の領域をもって明確に答えることができる問題である。

## (2) この世という、日常生活の中で、アイデンティティの根幹に関わる問いについて、いかに答えていくか

この問題について、サッカーのルールにたとえて考えてみる。サッカーという競技では、キーパー以外、スローインのとき以外は、手を使ってはいけない。当然手を使った方が、相手のゴールにボールを入れやすい。しかし、この限定があるからこそ、サッカーという競技は面白い。さらに、限定があるからこそ、ボールを蹴るといふ技術が発展していく。つまり、限定があつてこそ面白さや意味があるといえる。

同様に、この世に限定して考えるからこそ、答えを出す際の難しさは増すと同時に、この世で自分が

生きているという意味について、より深く理解できる可能性があると考えられる。

つまり、この世に限定して、この世の範囲内で、自分が生きていることの意味、アイデンティティで言えば、自分がこうして生きている自分であることの納得感を、いかにしてくみとってくるか、という問題である。向こうの世界を想定しないで、こういう人間として生きている自分の宿命についての納得感を、得ることができるだろうか、という問題である。この問題は、いかなる向こうの世界からの言及にもよらずに、さらに、いかなる排他的な社会的プロトタイプにもよらずに、こうして生きている自分への納得感、自信を得ることが可能だろうか、という問題にも、つながっていくものである。

向こうの世界を想定して今生きている自分の生の意味を提示することは、強力である。そして、排他的に他者を排除することによって自分を肯定することも、強力である。しかし、竹田(1989)が現象学においてその現代社会における意義として強調するように、そのどちらもが、この世で異なる他者と共に生きることというルールに反している。

向こうの世界からの視点を持つことなく、生きるこの意味をこの世界の中からくみ取ってくることができるだろうか。つまり、自分が自分であることについて納得することのできる、基準を、見方を、この世界の中から見つけていくことができるだろうか。

筆者が居場所という言葉に注目する理由の一つに、現実というこの世界において、生きている自分が活動している場所、居場所という見方をすることによって、そこからいかなる生きるこの意味を、自分が自分であることを納得することのできる基準を持ち、さらに、自分が自分であることを納得できる体験を居場所においてすることができるか、が問題となっているといえる。

このことは、居場所という見方をすることによって、限定されてこの世界において、この世界をよく見ることができる。つまり、足しか使わない、手を使わないという限定をすることによって足の技術は発達する。同様に、この世界に限定することによって、居場所という見方において、この世界を自分がこの世界において生きていることを、じっくりと見ることができる。さらに、このようなことができ

れば、向こうの世界を想定することが、この世界においていかなる意味があるのかが明らかになり、信仰を持つ者においても持たない者においても、この世に限定する見方は意義が生じるといえる。

### (3) 現代社会の問題

エリクソンは、文化人類学的研究によって、スー族インディアン(アメリカ先住民族、ネイティブアメリカン)においては、彼らの社会的プロトタイプは、小さく確固としていると述べる。これに対して、我々の現代社会においては、社会的プロトタイプは、流動的で派閥化し相互に矛盾するものとなっているとしている(Erikson, 1959)。

社会的プロトタイプという、社会的規範のようなものは、現代において、影響力があるものなのだろうか。つまり、差別や偏見という、外圧的に、個人に押しつける形態における、社会的プロトタイプは、いまだ個人に影響を与えている。しかし、それ以外の、強い力を持つ、社会的プロトタイプ、心理社会的価値観は何かあるだろうか。

個人、この自分というものは、現代社会の中で、消費者として、その欲求を最大限満足してよいとされる立場にいる。つまり、苦しい生活と快適な生活の対比の中で、快適さを追求できる、商品を買う立場にいる。このように、個人の欲求の満足、科学技術の発展において、許されている。消費社会の中で、快適さを追求し、メディアを通じて商品情報を受け取り、そこでも快を得て、消費することによって、経済活動に参加し、そのためのお金を得れば、生活は事足りる。また、マスメディアによる「快」や「お祭り」騒ぎは、商品の広告を見せるために、番組の視聴率を上げるために、必要とされているものといえる。このような、お祭り騒ぎにおいて、確固とした信念や価値観などは無化されてしまっているといえる。様々な番組においては、単にお祭り騒ぎには終わらないものもあるといえるが、「悪貨は良貨を駆逐する」のことわざ通りに、影響力のあるものは、「悪貨」の方であるのではないか。

このように、現代社会においては、偏見や差別といった強力な社会的プロトタイプ以外は、マスメディアの「お祭り騒ぎ」において、無化されている傾向にあると考えられる。つまり、個人においては、何が生きていく上で大切かという、心理社会的価値

観について、取り立てて挙げるような確固としてもものを見つけにくくなっているといえる。とりあえず、食べていくこと以外に、何が大切かわからないし、楽しいこともそこそこあるし、という日常生活の感覚が、一般的ではないだろうか。

このように見ていくと、多くの日本における現代人においては、アイデンティティが問題になることもなく、アイデンティティ危機に陥ることもなく、日常生活においては生きていっているのが、現状であるということができる。日常生活においては、心理社会的価値観が露わに問題となることもなければ、アイデンティティ危機の生じることはない。このような現状があることをこれまで示してきた。ところで、排他的な社会的プロトタイプ以外には力のあるものはなく、確固とした心理社会的価値観も無化されていく、このようなことが現状であるといえる。

青年期のアイデンティティ危機において問題となる、大人として納得のいく自分になりたいという思いは、「一人前の大人になりたい」「子どもの自分ではありたくない」という大人像が根底にあって生じるものであるといえる。

エリクソンは、この点について、次のように述べている

アイデンティティという理論全体そのものが、過去の一時代、ひとかどの人物でありたいと人々が願った時代に密接に結びついていたものかもしれないのだ。(Erikson, 1973 近藤邦夫 訳 p165)

大人と子どもの境界線を明確に引き、大人として自分への成長を強く欲するからこそ、アイデンティティ、自分が自分であることを強く納得して受け入れたいという思いが生じるのであるといえ、この前提がなくなれば、青年期において発達上でアイデンティティ危機が生じることはないのである。

さて、このような現状において、アイデンティティを問題にすることの意義は何か。それは、実存的視点においてである。先に述べたように、自分が自分であることは、宿命、縁、実存に関する問題である。生涯を通じて、このような自分として生きていくこと、生涯を送ることを納得して受け入れたいという思いに駆られることは、現代社会においても遭

遇することはある。このような場合、自分が自分であることを納得して受け入れることのできる基準を、問い直すことは意義のあることであるといえる。

## 5. 今後の課題

本論は、アイデンティティを実存的視点で捉え考察したものである。アイデンティティには様々な視点があり、他の視点を否定するものではない。ただ、筆者は実存的視点で捉えることこそ、アイデンティティという言葉にふさわしくかつ現代的な意義もあると考えている。

第一に、アイデンティティを自分が自分であることとして捉え、そこには自分を納得して受け入れる基準があるとすると、問題となるのは、「ありのままの自分」「そのままの自分」でいいのではないかという問いである。これは、ロジャースの言う「無条件の承認」(Rogers,1957)に関わることである。

自分が自分であることの基準という見方をすると、無条件の承認というのはいりえないと言わざるを得ない。現実の世界で生きる中では、様々な基準を持たざるをえないのであり、様々な基準を持つことにおいては、無条件の承認と言うことはあり得ないというのが現時点の筆者の見方である。そして、無条件の肯定的配慮の対象とすべきものは、自分が自分であることを納得して受け入れたいという思いであると考えられる。この点については、今後の検討課題である。

第二に、竹田の言うところの現象学的方法(1989)をより明確に提示することが必要である。日常生活から、自分が自分であることの納得感を得ることを考えると、この世界で生きていること、当たり前前に生きていることを、平凡な生活をより感覚をとぎすまして見つめる方法として、自己理解につながるものである。自分が生きている、様々な居場所を見つめ、そこに、自分の生きている意味がくみとれるかどうか、自分が自分であることの納得を得られるかどうかを、確かめて見ることである。

居場所という見方をすることは、この世で生きていることををよく見れるためであると主張するならば、そこから何が見えてくるのかをより提示する必要がある。そのためにも、現象学的方法の洗練は重要である。

そして、滝沢・広田(2003)は、教育に関わる問題を現象学の立場で考えていく上では、「当事者意識」の重要性を指摘している。この点から考えると、自分がこうして生きている自分であることを、自分自身の問題として、当事者意識を持って考えることの重要性和難しさがあると考えられる。さらにこのこと以外にも、現象学的方法に至る問題点はあると考えられる。

第三に、本論ではアイデンティティについての概念的検討に終始したが、アイデンティティが問題となる場としての、居場所について明確にしていく必要がある。現実世界で自分が生きていること、つまり、日常生活において、自分が持っているいくつかの居場所から、アイデンティティを、言い換えると、こうして生きている自分が人生を歩んでいることを納得して受け入れることのできる実感をくみ取ってくるかが検討されるべきである。この点については、西平による全生活空間という見方との対比が検討される必要がある(西平,1970)。

そして、自分が自分であることの基準は、一人の個人の中でいくつかあってそれが相互に関係していると考えられる。さらに、それに対応していくつかの居場所がゲシュタルトをなしていると考えられ、このようなひとりの人間における居場所と自分が自分であることの基準の全体像を動きの中で、ダイナミズムとして描くことが、最終的な目標である。本論はそのための概念的な検討にあたるものである。

## 引用文献

- Erikson, E.H. 1959 Psychological Issues : Identity and the Life Cycle. International Universities Press. (小此木啓吾 訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E.H. 1968 Identity: Youth and crisis. W.W.Norton. (岩瀬庸理 (訳) 『主体性 (アイデンティティ) - 青年と危機 - 』金沢文庫, 1982)

- Erikson, E.H. 1973 *In Search of Common Ground* W.W.Norton & Company (近藤邦夫訳 1975 エリクソン VS ニュートン みすず書房)
- 竹田 青嗣 1989 *現象学入門* 日本放送出版協会
- 橘俊道 梅谷繁樹編 1989 *一遍上人全集* 春秋社
- 山中 恒 1973 *ぼくがぼくであること* 日本放送出版 (1975 角川文庫)
- 金城 一紀 2000 *GO! 講談社文庫*
- 西平 直喜 1970 *青年心理学方法論序説* 平安書院
- 西平 直 1993 *エリクソンの人間学* 東京大学出版
- Mary Shelly 1831 *Frankenstein Reprinted* 1996 W.W.Norton & Company
- 溝上 慎一 2002a *アイデンティティ概念に必要な同定確認 (identify) の主体的行為 - 実証的アイデンティティ研究の再検討 - 梶田叡一 (編) 自己意識研究の現在* ナカニシヤ出版
- 溝上 慎一 2002b *戦後の大学生論* 溝上慎一 (編) *大学生論 - 戦後大学生論の系譜をふまえて -* ナカニシヤ出版
- 無藤 清子 1979 *自我同一性地位面接の検討: 大学生の自我同一性* 教育心理学研究27
- 小沢 一仁 2000 *自己理解・アイデンティティ・居場所* 東京工芸大学工学部研究紀要第23号
- 小沢 一仁 2002a *居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み* 東京工芸大学工学部研究紀要第25号
- 小沢 一仁 2002b *学び支援の自己理解教育実践「大学生の心理学」を居場所及びアイデンティティの視点から捉える* 京都大高等教育研究第8号
- Rogers, C. 1957 *The necessary and sufficient condition of therapeutic personality change.* (ロジャース選集 伊藤博・村山正治訳 誠信書房 2001)
- 滝沢利直・広田信一 2003 *教育事象をめぐる当事者としての普遍洞察についての研究* 山形大学教育実践研究第12号